

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：34439

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25463624

研究課題名（和文）発達障害児の早期発見および早期支援システム構築に関する研究

研究課題名（英文）The study for early found and early treatment system among developmental disability children

研究代表者

尾ノ井 美由紀（ONOI, MIYUKI）

千里金蘭大学・看護学部・教授

研究者番号：70324788

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,800,000円

研究成果の概要（和文）：2004年以降発達障害者の法整備が実施されたが、発達障害の発見方法や対処法は不十分であった。そこで、療育に携わっている職員へのインタビュー調査から1.乳児期の発達障害発見の指標の作成し、感覚統合療法をアレンジした方法を用いて2.保護者支援を行い、その効果検証を行った。結果、発達障害児は、感覚統合障害に起因する行動により保護者や周囲の者は対応に困っていた。しかし、個々の児の特徴を捉えた個別支援によるソーシャルスキル獲得によって、十分な社会適応の可能性が示唆されていた。そこで、感覚統合療法をアレンジした方法を用いて保護者支援を行った結果、対人関係の改善とソーシャルスキルの獲得の効果が得られた。

研究成果の概要（英文）：Although support for developmental disability peoples is beginning from 2014, discovery methods and countermeasures are inadequate. Therefore, we founded indicators for developmental disability children by interview survey to staff engaged in special treatment, and we treated their mother by support program. Result, developmental disability children happened behavior caused sensory integration disorder. although their mother and surrounding people were in trouble, developmental disability children acquired social skills by individual support. We treated by arranging sensory integrated therapy, it was suggest that that Improvement of interpersonal relationship and social skills acquisition.

研究分野：看護学

キーワード：発達障害児 早期発見 支援プログラム

1. 研究開始当初の背景

平成 16 年度に心理機能の適正な発達及び円滑な社会生活の促進のために、発達障害の早期発見と発達支援を行うこと目的として発達障害者支援法が制定され、「特別支援教育」が実施された。しかし、発達障害の発見率については、6%から 20%と研究者によってバラツキが見られ、発見方法を始め、原因や対処法などが十分に確立されていない現状がある。

発達障害は遺伝率の高さからからも出生前からの支援が必要とされ、早期の症状発見と早期支援が二次障害に繋がる予後を左右することが指摘されているが、障害が周囲に認知されにくいことや障害特性、状態幅の個人差が大きいことから発見や診断時期は 3 歳から 5 歳が多い。早期発見と早期支援のためには、乳児期は中枢神経系の発達に伴う発見や支援方法が必要である。

2. 研究の目的

- 1) 乳児期での発達障害を発見するために、発達障害児アセスメント指標の作成とスクリーニング基準を作成すること。
- 2) 発達障害児の本人と保護者の身体的・精神的二次障害を予防することを目的に、発達障害児の生活習慣改善のための保護者支援を行い、その効果検証することを目的として以下の方法で行った。

3. 研究の方法

- 1) 高機能発達障害児の早期発見ツールの作成について、療育に携わる指導者にインタビュー調査を行い、協同研究者と連携し高機能発達障害児の早期発見のためのアセスメント指標の抽出した。
- 2) 抽出された指標の信頼性や妥当性検証のためにアンケート調査を行った。
- 3) IBP 法に基づいた発達障害児保護者

支援を実施し、終了後インタビュー法等を用いて効果検証を行った。

4. 研究成果

- 1) 平成 25 年 3 月から 5 月に発達障害児の発見指標作成のため、療育支援に携わる心理相談員 3 名と保育士 4 名、更に平成 26 年に幼稚園教諭 3 名に半構造面接を行った。(平均年齢：56.14 (±11.53) 才、調査対象者は全員女性で、療育支援の平均経験年数：33.29 (±8.68) 年)であった。気になる子どもの特徴として、心理相談員と保育士からそれぞれ 31 と 42 の 1 次コードが抽出された。両者に共通するコードとして、「感覚の異常」や「身体面の発達」および「障害の特徴」と「人との関わり」が抽出された。心理相談員では「感覚異常」や「睡眠の異常」「身体面の発達」などの感覚統合の未熟さが半数を占め、心理相談員にのみ「胎児期の影響」や「社会性の発達」および「きめ細かな指導の必要性」が抽出された。保育士では、「身体面の発達」や「発達の順序や時期」などの発達の異常が 3 分の 1 を占め、保育士にのみ「好きな遊び」や「児が動物へ転化する」などのコードが抽出された。

母の特徴では、心理相談員と保育士からそれぞれ 20 と 14 の 1 次コードが抽出された。両者に「遺伝的な素因」と「障害の受容」に共通するコードが抽出された。心理相談員では「子どもと親の関係」が最も多くを占め、心理相談員にのみ「親の社会との接点」が抽出された。保育士では「母の子どもへの対応」が最も多く、保育士にのみ「母の情報」が抽出された。

先行研究において、発達障害児は感覚異常を合併する子どもが多いことが立証されているが、今回の調査結果からも発見する視点として、「感覚の異常」が抽出され、「睡眠の異常」や「発達の順序や時期」などの

感覚統合の未熟さが抽出された。発達障害の対人面の特徴である「独特のルールによる対人関係」や「人との関りの違い」が明らかになり、「きめ細かな指導の必要性」があるにも拘わらず、母も「遺伝的な素因」によって対人面に弱さを持っていることから親子関係に問題が生じていたり、社会との接点に課題を抱えている姿が明らかになった。また、障害特性が明確でない発達障害の受容は、子どもと母の両者の素因に寄ることが明らかになった（図1.2）。

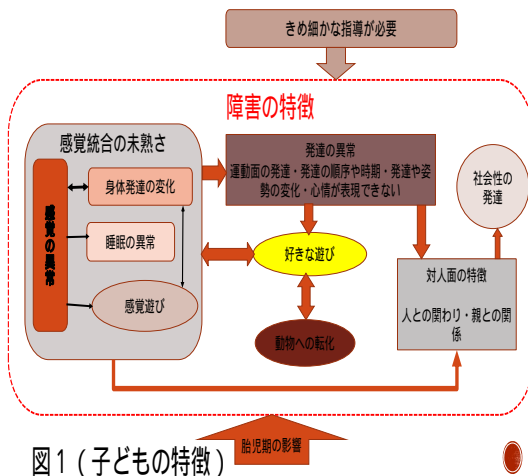


図1 (子どもの特徴)

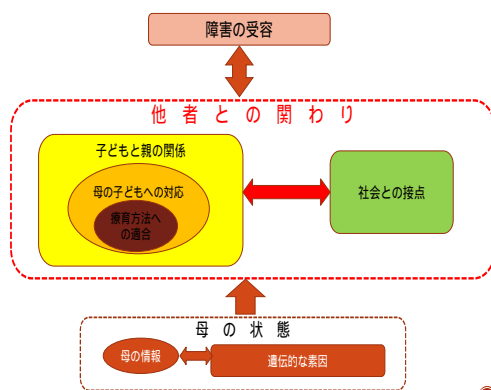


図2 (母の特性)

2)平成 26 年末から平成 27 年 3 月に、感覚統合に関する遊びや感覚異常指標を作成し（表 1.2）、ツールの妥当性や信頼性を検証するために 5 箇所の発達障害児支援センター通所中の幼児 140 人を対象にアンケート調査を行い、77 人（回収率：55%）の回答を得て現在分析中である。

表 1 子どもの遊びについて

遊 び の 種 類	番 号
1. 高い所に登る・高い所から飛び降りる遊び	
2. 粘土、水、泥、砂などの感触を楽しむ遊び	
3. 手すり、鉄棒などぶら下がる遊び	
4. 滑り台などの滑る遊び	
5. プランコなどの揺れる遊具を使った遊び	
6. クルクル回る遊び（例：空中に抱きかかえられ回る、回転する遊具）	
7. 幼児用車や三輪車、自転車などの乗り物遊び	
8. 「高い高い」など抱きかかえられたり、ほうられるような遊び	
9. 相撲のように、体がぶつかり合う遊び・綱引きのように、思いっきり力を出し切る遊び	
10. 力強く抱きしめられたり、撫でられたりするふれあう遊び	
11. クルクル回るものを見る遊び	
12. リズムに合わせて身体を動かしたり、止めたりする遊び	
13. むすんでひらいてなどの手遊び	
14. 工程のある遊び（例：砂場でトンネルを掘るためにまず山を作る）	
15. 他の子どもに見えないように隠れるかくれんぼ	
16. 風船をわらずに飛ばす遊び	
17. 遊びや趣味のレパートリーが少なく、いつも同じような遊びばかりしている	
18. 歌・音楽や食事の時間など、にぎやかな場所、時間帯は落ち着きがない	
19. 友達と遊ばずに、一人で過ごしている	
20. 集まりや朝礼などで、長時間じっ	

と立っていることが苦手である	
21.皆と一緒に話を聞いて共に行動できない	

- 1 : 大嫌い : 全くあてはまらない
- 2 : 嫌い : あてはまる
- 3 : ぶつう
- 4 : 好き : あまりあてはまらない
- 5 : 大好き : とてもよくあてはまる

表2 子どもの感覚

項 目
1.大きな音や特定の音が苦手である
2.強い日光の下で目を細める
3.テレビやパソコンの画面から目をそらすことが多い
4.周囲に色々な物があると、注意してもうろろと動き回る
5.暗い所を異常に怖がったり、好んで閉じこもって遊ぶ
6.色や形にこだわる
7.歯ブラシを使ったり、顔を触られるのを嫌がる
8.耳かきをされるのを嫌がる
9.頭を洗ったり、帽子をかぶったりするのを嫌がる
10.指先を触ったり、爪を切るのを嫌がる
11.手ぬぐいやタオルが触れるのを嫌がる
12.食事が手につくのを嫌がる
13.背後から近づくと、とても驚く
14.決まった服や靴下しか身に着けない
15.他の人が気づかないような小さな物音に気づく
16.臭いに敏感である
17.味に敏感である (味付けが変わると食べられない。特定の味付けしか食べられない)
18.抱っこをせがむ
19.おんぶしてほしがる

はい(ある) 時々ある、いいえ(ない)
わからない

3) 発達障害児支援プログラム作成のため、作業療法士と連携の元、8名の保護者に感覚統合療法を活用した個別プログラムを月1回30分から60分程度を行った。理学療法士が児の発達や姿勢、感覚チェックを初回と終了時に行い、保健師が所見に基づいた生活プログラムを立て個別指導を行った。プログラム終了後参加者と発達支援センター職員および理学療法士に半構造面接を行った。結果、児は【人に対する意識】の芽生え【共感を求める姿勢】の出現により【表情の変化】や【身体バランスの改善】などの変化が見られた。一方、保護者からは一様に【児の様子を客観的に捉える】ことができるようになったが、児を【トータルにみてくれる人がほしい】というニーズが抽出された。発達支援センター職員(保育士)からは療育場面と自宅での児の様子の違いや、保護者から【育児の相談】や【家族間の問題】の相談が出現するようになり、個別支援の必要性と共に、専門職間の連携によるトータルな関わりの必要性を実感したことが明らかになった。

【プログラム】

方法：個別指導

頻度：1回/月、30分～1時間/回、6ヶ月

プログラム内容

初回・6回目：作業療法士による子どもの発達アセスメント

全回(6回)：保護者の個別指導

対象者：A市発達支援センター通所中の保護者8人

児の年齢：3歳4ヶ月～5歳7ヶ月：平均4.8(SD:9.2)歳

指導内容：身体発達、精神発達、対人面。感覚のアセスメント、生活リズム、保護者の困っている事の情報より、次回までの目標を決定する

2回目以降：理学療法士のアセスメントによる自宅プログラムの紹介、目標達成度と修正

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7件)

作田はるみ、尾ノ井美由紀、米倉裕希子、奥田豊子、下村尚美、内田勇人、北元恵利、智的障がいのある幼児の食生活と肥満、小児保健研究、査読有、73巻2号、2014、300-307

尾ノ井美由紀、乳幼児の発達障害児の生活習慣実態調査、第2回日本小児診療多職種研究会抄録集、査読有、1号、2013、98

尾ノ井美由紀、高機能発達障害児の早期発見と早期支援に関する研究 療育支援専門のインタビューからー、第2回日本公衆衛生看護学会プログラム集、査読有、1号、2014、230

石村吉偉、尾ノ井美由紀、地域で子どもを支える大人の役割、奈良県教育委員会人権地域教育講演会報告集、査読無、1号、2014、1-3

尾ノ井美由紀、大見サキエ、発達障害児早期発見に関する研究、第34回日本看護科学学会学術集会講演集。査読有、1号、2014、681

河合のり子、尾ノ井美由紀、急性期認知症患者の地域連携に関する一考察・退院支援の課題と対応による変化、日本認知症ケア学会・関西大会抄録集、査読有、1号、2014、25

尾ノ井美由紀、伊藤美樹子、白井文恵、一般病院における外来看護師の在宅療養患者支援の課題、千里金蘭大学紀要、査読無、46号、2015、145-150

〔学会発表〕(計 5件)

乳幼児の発達障害児の生活習慣実態調査
高機能発達障害児の早期発見と早期支援に関する研究

発達障害児早期発見に関する研究
急性期認知症患者の地域連携に関する一考察・退院支援の課題と対応による変化
一般病院における外来看護師の在宅療養患者支援の課題

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

尾ノ井 美由紀(ONOI MIYUKI)

千里金蘭大学・看護学部・教授
研究者番号：70324788

(2)研究分担者

早川 和生(HAYAKAWA KAZUO)

三重県立看護大学・看護学部・教授
研究者番号：70142594

(3)連携研究者

米倉裕希子(YONEKURA YUKIKO)

関西福祉大学・発達教育学部・准教授
研究者番号：80412112

(4)連携研究者

作田はるみ(SAKUTA HARUMI)

神戸松蔭女子学院大学・人間科学部・准教授
研究者番号：40369723